
樹怨

壬宇羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

樹怨

【ZPDF】

Z8925M

【作者名】

壬宇羅

【あらすじ】

クラスメイトとの林間宿泊会。

楽しくなるはずだったそのお泊り会は、悪夢の入り口だった。

「見えてきたよ、あれが今日泊まる別荘だよ～」

そう言つて、バスから身を乗り出し、頭角が見えてきた別荘……。
(いや、どう見ても山小屋だろ)を指差して、楽しそうにはしゃぐ
のが、今回の、林間宿泊会の言出しつべ、”杉野美鈴”だ。

元々俺は、参加メンツには含まれては居なかつた。

しかし、夏休みも中盤に差し掛かり、半分夏バテ気味の状態で、テレビの甲子園を眺めながら、別段どちらを応援しようとも、野球を見て楽しもうとも思わず、ただぼうっと眺め、丁度、いい具合に氷菓子が溶けてきた頃。唐突に電話が掛かってきた。

相手は、級友の女子で、「林間宿泊会があるんだけど、あたしちょつち参加できなくなつちゃつたからさ、代わりに行つててくれないかなあー」と、なんとも断りにくい事を言われ、仕方が無いから承諾したのが事の始まりだ。

今思えば、この時もつと考えていれば、あんな惨事には見舞われずに済んだだろうな。

もつとも、男女比4対2、何故半々にしなかつたんだ、と言つ状態を除けば、まったく普通なように思えたんだ。少なくとも、その時の俺は、そう思つていたんだ。

「着きましたよ～」

到着後、バスの扉が開いた瞬間、雷光の如く車外へ駆け出し、まだ

バスの中で、もたついていいるメンバーに手を振りながら、喜々とした笑顔で、きやきやとはしゃぐ美鈴。

車内には、雷光の如く駆け出した馬鹿の持ち物が散らかっている。美鈴よ、その気持ち、わからんでもないが、ちょっとは落ち着け、荷物全部置きっぱなしじゃ無いか。

はあ～っと、一息溜息を吐く。

その間に、美鈴の荷物は、お世話係の手によつて車外へ運び出されていた。

その運び出した、お世話係は、”格ハルカ”である。

常に美鈴の付近におり、護衛からなにから、全てを担つている。

ハルカがいない美鈴は、ただのドジっ子高校生だろう。

美鈴のドジは、全てハルカが回収し、それにより、なんとか一般生徒同様の生活が出来ている。

ハルカのナイスフォローに、親指をグツと立て、サインを送るが、フツと一蹴される。

男子には無愛想なのが難点だな。

残りのメンツは、俺を除いて唯一の男、”林達也”……てか、こいつ、俺が参加する前から、参加が確定していたようだが、仲がいいのだろうか？

そのような感じは一切感じた事がないのに。

つてか、こんな楽しそうな事やんなら、俺も前持つて誘えよ。

それで、運転手に、小学生料金は半額だよ、とからかわれているのが、”森嶋理子”正直なところ、一度も会話をした事がない気がする。

そして、最後が俺の幼馴染……。先に言つておくが、別に深い意味は無いぞ。

”花野椿”、花野と書いて、”かの”と読む、なんとも変わった苗字が、第一印象として一番の印象に残るところだらう。

まあ、当人それを気にしてるから、大きな声じや言えないとんだがな。

まあ、そんな面々が今回の、林間宿泊会のメンバーって訳だ。

とか、何とかしてる間に、バスの扉が閉まり。「出発しまーす」と言つ、運転手の声が、俺以外誰もいない車内に響き、プシューっと、空気圧の下がる音が聞こえたと思つと、バスは動き始めた。

「ちよ、ま、降ります！…、降ります？」

「兄ちゃん、立つんじゃねえやい。すぐに止まるからよ」

と言つて、止まるまでに数秒かかり、更には、バス代も割高に取られ、何故目的地から遠ざけられたのに、多めに払わにやならんのだ、と心中で大喚きした後で、忌々しそうな顔つきを運転手に、アピールした後に、のつそりと降りてやる。

「やうだい、兄ちゃん、あんたらあそこは山小屋つて言つ認識なのか。

まあ、あんななりじや仕方がないよな。

「……、兄ちゃん？ 聞いてるかい？」

「……ああ、はいはい、聞いてますよ」

「あの山小屋な、あんまりいい噂を聞かないんだよ……、用心した方がいいぜ。これ、お兄ちゃんからの、ちょっとしたプレゼント

だ

そつ言つて、俺の手に虫除けスプレーを握らせた。

てか、カラだよな……。

「一応、礼は言つておくが、こんなゴミ、もうすんじゃねえよ」

カラの虫除けスプレーは、宙を舞い、崖のしたへと落ちていき、縁の中に消えて行つた。

「あつ、こら。人が折角やつたもんを捨てるんじゃねーよ
いいから、とつとと、業務にもどれ、次の停留所で人が待つてゐるさ。

はあへつと、溜息をついてあいつらの待つてゐる、停留所に向かつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8925m/>

樹怨

2010年10月9日05時36分発行